

社会関係の再構築としてのケア改革

AOLD1055 本間照雄

1 本論文の目的

これまで、介護現場の内外では、常に「ケアの質の向上」に関する議論が交わされてきた。この議論の多くは、集団処遇から個別処遇への転換として語られている。しかし、ケアの質の議論や取り組みがいかなる言葉を使って行われようと、依然として身体介護を対象とした視点で語られ取り組まれ続けていることには、生活者としての日常の確保から目が離れている感があり、大きな違和感を持つ。

一方、わずかではあるが、提供者（施設）と利用者（本人・家族）及びそれを取り囲む地域住民相互の活発な関わりのあるケア実践もあり、ここでは、多様な関係性の中でケアが行われ、ケアの質に対する視点に大きな違いを見ることができる。このため、これら相互の関わりとケアの質の向上との関係について現状に即して把握し、そこにある社会関係を切り口にしながら、ケアの質に求める視点に新たな方向性を見いだすことが本論文の目的である。

2 各章の要旨

序章

過去のケア改革の動向及び主要な調査研究を本論文の主題と問題関心に即して整理し、次章以降で展開する議論への橋渡しをした。

第1章

本章は、ケアの質に関する議論及びサービス評価事業並びにユニットケアに触れ、ケアの質についての検討や捉え方を見ていく。これらの作業は、現時点でのケアの質の向上を図る取り組みと次章以降の実践事例との違いを浮き彫りにするために行うものである。

はじめに、ケアの質に関わる政策提言や制度改正の経過を振り返り、ケアの質はどのように扱われていたのかを把握する（第1節）。さらに、ケアの質の向上を図る評価事業や介護現場職員の声から、ケアの質の現状を把握する（第2節）。その上で、現在、最も進んだケアとして全国的に行われているユニットケアに触れ、現時点で到達しているケアの質を把握する（第3節）。これらのことから、現時点では個別ケアをもって質の高いケアとしていることを確認した（第4節）。

第2章

本章は、宮城県初の新型特別養護老人ホームが取り組む事例を取り上げている。本章の課題は、地域住民との関わりを活かしたケア手法に着目し、生活感のある施設ケアがいかんしてつくりあげられていったのかを明らかにすることである。その上で、さまざまな関わり合いに見る新たなケア関係の持つ意味について論じる。

「杜の風」では、行政や地域住民などの社会資源の支援を受けながら施設の中に地域を取り込み、生活者としての振る舞いを引き出すことに置いている。その振る舞いは、自立的生活を促すとともに、他者に対する新たな振る舞いの表出を促している。地域を施設生活の中に取り込むことは、介護という日常的なケアをつうじて、依存的になりやすい施設生活を改め、地域で暮らしていた時のような自立的生活環境に再構築する。このことを意図したところに、ケアの視点の先駆性を見いだすことができる。

第3章

本章は、地元自治体が、市町村合併後の過疎地域のまちづくり、安全安心の地域づくりを意図して誘致した特別養護老人ホームが取り組む事例である。本章の課題は、地域の社会資源と共同で進める取り組みが、地域での暮らしの継続や安全安心のある地域づくりに、いかなる役割を果たしているのかを明らかにするところにある。

ここで行われている社会資源との協同は、施設ケアを地域の社会資源と一緒にやって行う協同と施設が人財育成の担い手となる協同との二つある。この組み合わせでケアが行われるところに、地域との関わりを持続的に持ち続けられている要因がある。協同で生まれる馴染みの関係は、地域住民から入居者に向けられるだけでなく、入居者から地域住民に向けられる関係もある。こうした相互の関わりを地域又は地域との関わりで社会資源化した施設で行うことは、入居者の地域生活者としての振る舞いを賦活化／維持するための意識形成を図る大切な機会になっている。施設ケアに終始せず、施設の地域貢献を端緒にした地域住民や社会資源が関わるケア環境には、自立的な入居者の日常を見いだそうする意図が読みとれ、そうしたところにケアの視点の先駆性を見いだすことができる。

第4章

本章は、知的障害者の地域生活を進めるために「共生型グループホーム」を創設し、その一般化を目指した取り組み事例である。本章の課題は、共生という制度を越えたケア手法が、地域で暮らす(脱施設化)ことを支える可能性とその意味を明らかにすることにある。

認知症高齢者と知的障害者、それぞれの暮らしが重なり合うことによって、全体としては一つの大きな暮らしの流れを醸し出す。両者が共に暮らすことは、他者との関わりを再構築していく集団過程と、各自が集団からの影響を受けて行動変容を起こしていく個人過程とが、相互補完的に展開することである。他者との関わりは、相互に新しい役割や意味づけを持って、さまざまに変化する活動的な場になっている。認知症高齢者のケアの場と知的障害者の住宅とが、日常の生活行為をとおして新たな社会関係を生じさせる場となり、認知症高齢者、知的障害者双方に自立的な日常生活の営みを生み出す。このことは同時に、ごくありふれた日常生活の営みを際立たせることに結びついている。このような日々淡々とした日常の繰り返しは、予見可能で安心感のある生活基盤を築き、次の一步を踏み出させる余裕を生み出している。

第5章

本章では、これまで取り上げた先駆的ケア実践のただ中にいる4人の日常生活を詳細に観察した。本章の課題は、介護（支援）行為の中で施設、家族及び地域社会との関わりが、個々人の地域生活に、いかに役立っているのかを明らかにし、施設や地域社会及び家族が関わることの意味及びそのようなケア環境で行われるケアは、何を目指しているのかについて考える。

日々の生活との向き合い方は、介護保険制度や自立支援制度が描いている「自立」の姿を具体的な形で示している。自立は、単なる介護の範疇にその姿を求めているのではなく、他者との関わりの中で膨らみを増す「楽しい」感情を持てるどころにその姿を見いだしている。自分の生活を楽しむことができるからこそ、潜在していたさまざまな生活行為が賦活化することに結びつく。このようにして生活行為に広がりを持ち、これまで見せることの少なかった振る舞いが引き出され、どこにでもあるあたりまえの暮らしの様子を見せる。自立の行き着くところは暮らして、暮らしの中でこそ自立が成り立つのであって、暮らしが自立を生み出し自立を支えるのである。住み慣れた馴染みの場所で他者との関わりを伴った先駆的ケア実践は、一人の地域生活者としての自立の姿を導き出す大きな役割を果たし、ここにこそ、ケアの質が求める姿を見いだすことができる。

3 終章（本論文で得た知見）

先駆的ケア実践に見た関わり姿勢は、単に他者と関わることに留まらず、その関わりをさらに発展させて互いにそれぞれの生き方と向かい合うものである。ここにある関わり機会は、馴染みの関係づくりの場となり、さら

なる関わりへの広がりや関係の親密さをつくりだす。他者への興味関心の高まりは、互いの人生や生き方と向かい合う関わりを築いていく。このような関わりから、本論文では「関わり合い、向かい合う」との表現を生み出した。

これらの地域生活の実像から浮かび上がってきたのは、地域との協同によって賦活化した「関わり合い、向かい合う」姿である。この日常化は、身体的、精神的衰えに対して特別な配慮を持って行う介護をそれぞれの暮らしを支えるための「あたりまえ」を求める生活支援としてのケアへの意識転換を促し、穏やかな日常、施設に持ち込んだ夫婦の生活空間、安定した繰り返しのある生活と言うありふれた日常のある暮らしを築き上げる土台になっている。

この「あたりまえ」を促し又は引き出すケアの場は、施設、地域及び生活の場を共有にする者とさまざまである。しかし、ケアがいかなる場で行われようと、常に地域との関わりを意識した生活者としてのケアを展開することで生活の一部となり、このことがありふれた生活行為を引き出し、その日常性がゆえに役割関係を生み出す場づくりへと発展し、役割獲得の機会へとつながっていく。

また、この役割獲得は新たな行動を引き起こすきっかけを生み、さらなる「関わり合い、向かい合う」機会を拡大させている。この拡大する新たな機会は、これまで介護とは無縁であった場所や組織／団体をも取り込み、従来のケア行為の延長線と言う枠組みではとらえきれない関係性をつくりだし、より一般化して地域社会へ拡散していく。ここに、地域との関わりによってつくりだされる「関わり合い、向かい合う」ケアの持つ特徴を見いだすことができる。

こうした新たな視点と特徴を持つケアとの向き合い方は、これまでのケアの質を一步進め、地域との関わりによってつくりだすケアの質に着目した「関わり合い、向かい合う」ケアと表現できる新たな段階へ歩み始めたといえる。すなわち、本論文で取り上げた先駆的ケア実践は、これまでのケアの質に対する見方を大きく変える、社会関係の再構築としてのケア改革であり、新たなケア環境をつくり出す社会関係の構築への助走の始めの一步になっている。